

音楽のチカラ

結成から四半世紀。
町の音楽シーンを常にリードしてきたバンドがある。
『宇出津吹奏楽研究会』。
イベントやコンサートなど、さまざまな場所で私たちに生の音楽を届けてくれる市民バンド。
25周年を迎えた宇出津吹奏楽研究会の活動やメンバーの思いを取材した。



継続は力

「楽しくなければ音楽じゃない」を合言葉に、音楽を通して地域に元気を発信し続けてきた宇出津吹奏楽研究会が、25回目を数える定期演奏会が開かれた。

宇出津吹奏楽研究会（以下宇出津吹研）の第25回定期演奏会は3月24日、能都庁舎4階大ホールで開かれた。

演奏会には約40人の会員が出演。第一部では吹奏楽の定番曲、第二部では映画音楽や歌謡曲など幅広いジャンルで計11曲を演奏した。

指揮者を務めるのは、結成時から変わらず坂武夫さん（63）と小本さん。出演した約40人の中には、坂さんの後輩で元プロのアルトサクソフラス奏者、浜岡実さん、金沢市在住のや、定期演奏会のために県外から駆けつけたメンバーもいた。

25回目という節目の定期演奏会。会場には、約二百人が詰めかけて生の吹奏楽に耳を傾けた。宇出津吹研の演奏会は、「楽しくなければ音楽じゃない」

の合言葉どおり、出演者と観客が一緒に音楽を楽しみ、会場が一体となる。この日の演奏会も、その場にいると元気が出て、心温まる『宇出津吹研らしい』コンサートとなった。

地域に根差した活動を

昭和62年、宇出津高校吹奏楽部OBが中心となって結成された宇出津吹研。現在の会員は町外のメンバーを含めて約50人で、年に一回の定期演奏会をはじめ、能都中学校、能登高校の吹奏楽部と共演するクリスマスコンサートなどさまざまなイベントに出演している。

数馬孝会長（45）は「25年続けてきて、地域の皆さんから声をかけてもらえるようになってきた。これからも地域に根差して、未永く活動していきたい」と話している。

▼チラシや看板など、すべて手作りの演奏会



能登音楽愛好会 会長
鍛冶谷 真一さん

吹研の演奏会は、音楽の力を感じさせてくれる。

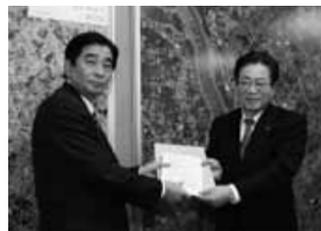
生の音楽をここまで続けてきたのは、本当にすごいことです。定期演奏会では、この日のために休みを取って県外から参加するメンバーまでいます。人を引き付け、心を動かす音楽の力を改めて感じさせてくれる演奏会でした。中高生バンド部員にとって、吹研は憧れであり目標です。子どもたちの成長にとっても、吹研の役割は大きいと思っています。

届け！負けるな！勇気の音色！

能都中学校吹奏楽部、能登高校吹奏楽部と宇出津吹奏楽研究会で構成する「宇出津プラスバンズ」は、昨年の東日本大震災以降、「届け！負けるな！勇気の音色！」を合言葉に各種コンサートを開催。冬の恒例「X'mas コンサート」からチャリティーコンサートとして募金を募っている。

集まった募金は、流山市の姉妹都市である福島県相馬市の市立向陽中学校プラスバンド部に、能都中学校吹奏楽部員のメッセージと共に贈られた。

「福島が能登でいつの日か合同演奏会を開きたい」という夢を描きながら、宇出津プラスバンズのメンバーは、今後もチャリティーコンサートを続けていく予定だ。



1月17日、宇出津プラスバンズから募金を託された持木一茂町長が、立谷秀清相馬市長に直接手渡した。（流山市役所で）

大切な場所



トロンボーン

萬田賢一郎さん

まんた・けんいちろう (43) 宇出津

事務局として雑用全般を担当しています。ブラスバンドは中学3年間だけの経験でしたが、リターンしたとき当時の会長で憧れの先輩だった堀正博さんに誘われて入りました。

私にとって吹研は遊び場のようなもの。みんなの手伝いをしているふりをして、自分が楽しんでます。これからもメンバーと楽しくやっていきたいですし、死ぬまで関わりたいと思っています。現在、吹研の公式ホームページを制作中です。近日公開予定なので、ぜひご覧ください。



トランペット

渡 絵美さん

わたり・えみ (28) 崎山

中学、高校時代に吹研の皆さんと一緒に演奏して、大人と一緒にやるのは楽しいと感じていました。吹研に入ったのは昨年12月から。地元に戻ってきて、萬田さんに声を掛けられました。就職してから5年間吹いていなかったのですが、まだまだ音は出ていませんが、学生時代とは違った楽しさがあります。

吹研は年齢や性別に関係なく、アットホームな雰囲気の中で気兼ねなく演奏できる場所。ストレス解消の一つとして、趣味として、私の生活の一部になっています。



宇出津吹研の練習は週2回。仕事や家事を終えたメンバーが、それぞれのタイミングで集まってくる。楽器好きのメンバーにとって、思い切り演奏ができる貴重な時間だ。

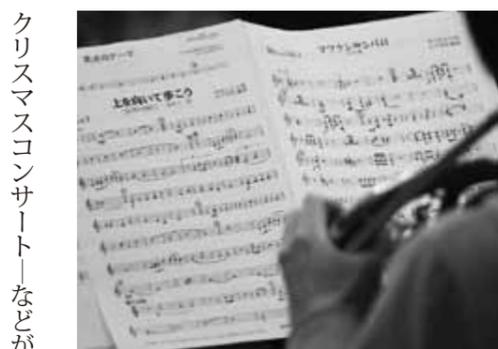
参加も集合時間も自由な練習

遠島山公園ハーモニーセンターに管楽器の音色が響き渡る。宇出津吹研の練習日は、毎週木曜日と土曜日の夜7時から9時まで。仕事を抱える社会人バンドとして、参加も集合時間も自由だ。演奏会前であれば30人以上集まるが、少ないときは3、4人の場合もあるという。

最初は個人やパートごとに練習。人数がそろえば、演奏会の曲について話し合い、音を合わせる。楽器に向かうメンバーの表情は真剣そのものだ。

一年に10回以上の出演 派生グループも

年に10回以上は演奏会に出演するという宇出津吹研。一年の締めくくりとなる定期演奏会のほか、恒例の行事として▼奥能登地区野外演奏会▼プロムナードコンサート▼サマーコンサート▼石川県市民バンドフェスティバル▼



経験豊富なメンバーは、新しい曲でも1、2回合わせるだけで形になるという。この日は次の演奏会で披露する歌謡曲を中心に練習していた。

クリスマスコンサートなどがある。ほかに、町や商工会などが主催するイベント、地区の文化祭、少人数メンバーでの慰問演奏など、少なくとも月に1回はどこかに出演している状況だ。少人数での演奏では『宇出津吹研』ではなく、構成メンバーによって『遠島山ウインドアンサンブル』やポップス中心の『軽音楽部』などの派生グループができる。

音が大きい管楽器は、社会人にとつてどこでも練習できる楽器ではない。週2回、2時間限定。ハーモニーセンターはメンバーの大切な場所だ。



宇出津吹奏楽研究会 会長
数馬 孝さん
 kazuma koh (45) 宇出津

親から子へ



親子で宇出津吹研に参加する
上野英明さん
加代子さん
 かなえ
奏笑さん

家族で音楽をできることが幸せです。

上町在住の上野英明さん(47)と妻加代子さん(46)、娘の奏笑さん(13)は、家族3人で宇出津吹研に参加する音楽一家だ。

英明さんは宇出津吹研設立メンバーの一人。「大学を卒業して地元で就職したとき、10人程度のOBバンドではなく本格的にやろうと声をかけました」と振り返る。

加代子さんは、宇出津高校吹奏楽部で英明さんの一年後輩。昭和62年にUターンして、宇出津吹研に入った。英明さんについて「音楽に対する考え方は昔から変わらず、自分に厳しい人。尊敬しています」と話す。

上野夫妻はメンバー同士で結ばれたカップル第1号。結婚式には宇出津吹研のメンバー約40人が集まり、生演奏で盛り上げたという。3人の子供には和音、^{かす}拓度、奏笑と音楽にちなんだ名前を付けた。和音さんは中学2年から吹奏楽部に入部。高校時代に定期演奏会など3回、同じステージに立った。

「子供に強制したことはなかったが、音楽をやっている姿を見るのはうれしかった」と英明さん。加代子さんは「娘

が生まれてから、一緒にクラリネットを吹くのが夢でした」と目を細める。奏笑さんは昨年4月、中学進学と同時に吹奏楽部へ。楽器は母親と同じクラリネットを選んだ。「吹研に参加することで、大人数で演奏する楽しさを知ってほしい」という両親の思いを受けて、11月から宇出津吹研に参加。部活動と吹研の両方で練習に励む。



本番も練習も、同じ楽器の加代子さんと奏笑さんは並んで演奏する。奏笑さんにとって、加代子さんがクラリネットの先生であり目標だ。

音楽も人生も、自分の思い通りに ならないことがあるから面白い。

ここまで長続きするバンドはめずらしいと思います。なぜ宇出津吹研がこれまでやってこれたのか。その理由の一つは、良い意味で『適当』にやってきたからです。力を入れすぎても続かないし、緩すぎても続きません。25年間変わらず、バランス良くやってきたことが良かったのだと思います。

宇出津吹研は『吹奏楽団』ではなく『研究会』。『研究』という言葉には、

向上心を持ち続けよう、何でもやってみようという思いが込められています。これからも、いろいろなことに挑戦していきたいと考えています。

メンバーは音楽、そして楽器が好きな人間ばかりです。『吹研』をやるのではなく、好きな楽器を演奏するために集まっています。

音楽も人生も、自分の思い通りにならないことがいっぱいあるから面白い

い。もし、もう一度楽器を吹きたい、演奏したいと思っている人がいたら、深く考えずに一緒に楽しみましょう。『来る者はこぼさず、去る者は追わず』が吹研なので、気軽にメンバーに声をかけてください。

宇出津吹研としては、次の区切りとなる30周年に向けて活動を続けていきます。本番は多いが練習は少ない宇出津吹研。地区の文化祭や老人ホームへの慰問など、メンバーが集まればいつでも、どこでも演奏に駆けつけます。これからも、宇出津吹研を気軽に利用してください。

うまいか下手かではなく、
良いか悪いか——。

生の音楽の臨場感を
感じてほしい。

宇出津吹奏楽研究会 指揮者

坂 武夫さん

Saka Takeo (63) 小木

宇 出津高校ブラスバンド部のOBたちが地元に戻ってきたとき、一緒に音楽

をやれる場所を作ろうと思った」
宇出津吹奏楽研究会で25年間、指揮者を務める坂武夫さん(63) 〓 小木 〓 は吹研結成の経緯を振り返る。

小木中学校、飯田高校時代はブラスバンド部に所属し、トランペットを吹いていたという坂さん。大学を中退して地元に戻った40年前、高校時代の恩師から宇出津高校ブラスバンド部の指導を頼まれた。

「トランペットを吹くことはできても指導経験はまったくなかった。指揮法も含めて一から勉強し直した」

指導を続けていくと、Uターンで地元に戻ってくるOBも増えてきた。坂さんは教え子であるOB約10人と『宇

出津高校OBバンド』を結成。その後、昭和62年に宇出津高校以外のOBや現役高校生なども含めた『宇出津吹奏楽研究会』を結成した。当時、市民バンド自体が少なく、奥能登全域から約50人が集まった。

吹研の音楽はB級グルメ

「ブラスバンドにはコンクール至上主義がある。吹研はコンクールを目指す王道ではなく、B級グルメのようなもの。音痴でも歌い、下手でも演奏する。どうアピールさせるか、いかにメンバーをかつこよく見せるかが指揮者である自分の仕事」と言い切る。

宇出津吹研のテーマである『楽しくなければ音楽じゃない』は、演奏するメンバーはもちろん、観客も一緒に楽

しむこと。そのスタイルは、ほかの市民バンドとは一線を画し、『宇出津吹研らしさ』として音楽関係者のファンも多いという。

「会場に足を運んで聴いてくれたお客さんに『ブラスバンドっていいな』と思ってもらえる演奏。それは、うまいか下手かではなく、良いか悪いかだ」

目指すは『おらが町のバンド』

「市民バンドの運営は難しい」と坂さんは語る。年齢も職業も幅広い社会人が中心。考え方や音楽性も違うために意見の対立が起きやすいからだ。

「練習に半分しか参加できない人もいれば、レベルを高めたいという人も。大切なことはバランスを取ることに。市民バンドが存続するためには、

お互いを尊重しあう『なあなあ関係』が必要であり、吹研にはそれがある」

活動が長年続いているもう一つの理由は、主要メンバーのほとんどが学生時代に坂さんの指導を受けた教え子であることも大きい。『坂さんと一緒にやりたい』『坂さんの指揮で演奏したい』とメンバーは口をそろえる。そこには、時に優しく、時に厳しく指導する坂さんへの絶対的な信頼感がある。

『おらが町のバンド』として自他共に認められるバンドを目指したい」と語る坂さん。夢は演奏会に500人以上の観客を集めることだそう。

「生の音楽には力がある。その臨場感を会場で感じてほしい」

宇出津吹研が継続していくために、音楽で地域を元気にするために、坂さんはこれからも指揮棒を振り続ける。